

行動について

岡 知 史

Wie ich beharre, bin ich Knecht,
Ob dein, was fraglich, oder wessen.

(私が停滞したら、私は奴隷だ、
君の奴隷か、誰の奴隷か、私の問うことではない。)

ゲーテ「ファースト」より

行動とは何か？ 行動とは創造である。無から有を産む創造である。われわれは行動しないかぎり無に等しい。いや、無そのものとしてよい。行動しないわれわれは何ものでもない。「にんげん」でさえない。「にんげん」であるということは、「にんげん」であるために行動することを意味する。だからこそ、生命を賭してでも「にんげん」であろうとする人がいる。「にんげん」であることが尊いのは「にんげん」であろうとする行動が尊いからだ。行動は欲求の充足ではない。

欲求とは地面に腰をおろし、手をのばして物を取ろうとすることだ。欲求する人の「動き」は彼の位置を支点にしている。いわば同心円を描きながら彼の手は届くものを引き寄せる。彼は靴をはかず、自己の体温であたためられた座ぶとんの上で、もっと手をはかせないかと思案している。彼は岩にへばりついた牡蠣である。牡蠣は硬いカラで身を守る。座ぶとんの上に頑丈な石の屋根を築く。欲求する人は臆病で、自分の身を第一に考えるものだ。

行動する人は「移動」する。自分の足で歩くのである。歩くためにはまず片足をあげる。一本足で支えられた体は前に傾く。前のめに倒れそうになった体を、あげていた片足によって止める。だが体の勢いは止まらず、さらに重心は前方へ移る。もう一方の足が地を離れる。再び一本足になる。不安定な体はますます前に倒れる。後方の足は半身ほどのへだたりを越えて前に置かれる。その足で傾いた全身を支えるのだ。歩くとはそうした繰り返しだ。人間は倒れつつ歩いている。傾き、倒れ、支え、また傾き。倒れ、支えて歩いている。それだから時には転ぶ。地に額をぶつけ血を流し、道

いづくばる目もある。しかし、それは覚悟の上なのだ。それを覚悟で歩く。それを承知で行動する。

片足を上げ一本足で立つことから、歩くことははじまる。座っていないのは動けない。動くためにはまず倒れなくてはならない。不安定に身をさらすのである。行動に危険が伴うのはそのためだ。安全圏にいては何もできない。舞台の上でどんなに走りまわっても、それは演技でしかない。走りまわって戻ってこれる場所があるなら、それは鎖でつながれた犬だ。

投げたのである。どんな保証もなく、なんの予感もつかめないまま、激しく予定であることを拒みつつける未来に向かって、「私」の現在、すなわち「私」のすべてを投げだしてしまうのだ。そこに「賭け」としての行動がある。投げたものは地に落ち、砕けるであろう。または大いなる濁流の中にその姿を散らすだろう。いずれにしても、それを再び取りもどすことはできない。何かを求め、八方に延びゆく手と比べてみるといい。その手は何もつかめないことがわかると再びその懐に戻るだろう。だが、それゆえに求める手はいつまでも虚しいのだ。

長篠康一郎著

太宰文学アルバム

女性篇 広論社刊 (B5判)
一九〇ページ 二、四〇〇円

太宰治武蔵野心中

女性篇 広論社刊 (B5判)
二三〇ページ 一、〇〇〇円

谷口 謙著

蕪村の丹後時代

人間の科学社
三四〇ページ 一、六〇〇円

井戸 誠一著

赤松円心則村と

中央出版

その一族(下)

二四一ページ 二、五〇〇円

西播文学

西播文学 78号

目次

評論 エッセイ

- 本間虚舟
一竜野藩の文芸と学問— 曾谷正宏
漱石と太郎次
一「数」その三— 接木幹
蕪村ノート
一俳句、和歌と新体詩— 谷口謙
行動について 岡知史

詩

- 一私から、私への手紙— 杉木衣子
拝啓、三木露風様 小林和夫
青い炎 田部信
しめ 史女の茶屋 玉岡松一郎
終戦 風来凡三
日常への回帰 石山淳
碧色の夜、朝霧の想い 長船悦子
春への誘い 三木宣子
七七子のふる里 玉野昌子
柱 藤田多香子

小説

- そして吉野へ 井戸誠一
暮れの日曜日 南野昌也
古ぼけた椅子 (その六) 吉田公宗
ロンリー、ハリケーン 田淵登和子

西播文学（七八号）

昭和五十七年八月一日印刷

昭和五十七年八月二十日発行

竜野市竜野町大手六〇

発行所 西播文学会

発行人 井上一夫

印刷所 神戸刑務所